八洲学園大学紀要　第２号（2006）、P65～P76

倉橋惣三の幼児教育思想

―― 教師論を中心として ――

福　田　博　子

Thought of Early Childhood Education in
Souzou Kurahashi
— Focusing on Teacher Theory —

FUKUDA, Hiroko

キーワード：子どもへの愛　　慎重さ　　子どもから学ぶ　　家庭教育研究
幼稚園教諭の養成

１　はじめに
２　幼稚園の歴史と現状
３　倉橋惣三の生涯と業績
４　幼児教育論
　（１）教師論
　（２）保育論
　（３）先哲の教育思想の解釈
５　おわりに

１　はじめに

2004年（平成16年）８月25日に、中央教育審議会幼児教育部会と社会保障審議会児童部会の合同の検討会議において、「就学前の教育・保育を一体として捉えた一貫した総合施設について」の中間まとめが発表された。そして、この年12月に、「審議のまとめ」が取りまとめられた。

その主なものを挙げると、基本的機能として「親の就労の有無・形態等で区別することなく、就学前の子どもに適切な幼児教育・保育の機会を提供し、その時期にふさわしい成長を促す機能を備えることが基本。」また、教育・保育の内容では「現在の幼稚園教育要領及び保育所保育指針を踏まえ、子どもの発達段階に応じた共通の時間・内容を確保しつつ、子どもの視点に立ち、きめ細かな対応に特に留意しつつ引き続き検討。３～５歳児については、４時間程度の共通の教育・保育時間における活動内容を幼稚園における教育に相当するものと位置付けること。」さらに、幼稚園及び保育所との関係等では、「地域の幼児教育・保育のニーズに対して、既存の幼稚園・保育所の連携の強化等により対応するか、さらに新たな枠組みである総合施設を組み合わせて対応するかは、地域の実情に応じて判断されるべきもの。」[1] とまとめている。

幼稚園は、時代の波によって、大きく変貌した。地域のニーズによって、幼稚園と保育所がいかに強固に連携しようが、両者が組み合わされて総合施設になろうが、子どもの視点に立って、きめ細かな教育・保育をしていくことが必要であり、そのためには、教師の質を高めていかなければならないのではないかと思う。

では、幼児教育者･保育者とは、どうあるべきなのか？大正、昭和にかけて日本の幼児教育の理論

及び実践における指導的役割を演じた倉橋惣三は、幼稚園教諭についてどのように考えていたであろうか？倉橋は、児童中心主義の保育を提唱し、実践し、日本の保育を先導した。倉橋は抽象的な理論を好まず、幼児の生活の具体的な姿を捉え、彼独自の保育論を樹立した。

今、幼児教育の原点にかえって、倉橋惣三の幼児教育論を考察したい。とくに、幼稚園教諭という観点で述べることにする。

2　幼稚園の歴史と現状

まず、幼稚園の歴史を簡単に振り返ってみよう。

我が国で幼稚園が最初に設立されたのは、1876（明治９）年11月であり、東京女子師範学校付属幼稚園である。開園当初は、園児達の多くは、裕福な階級の子女で占められていた。また、幼稚園を設立する場合、施設や設備が整備されていなければならないという認識があったので、幼稚園の普及は進まなかった。明治15年、幼稚園の編制を簡易にし、富裕階級の子女だけでなく、貧民階級の子女も利用できるように勧告した。さらに、当時、幼児を小学校に入学させる傾向があったため、文部省は、明治17年に学齢未満児に小学校入学を禁止する通達を出した。これによって、幼稚園の数は増加し、明治30年には、全国の半数以上の都道府県が幼稚園を設置するに至った。

明治中期以降、貧民の子女を対象とした幼稚園も設立された。そして、私立の幼稚園が多くなった。私立の幼稚園の普及に貢献したのは、キリスト教の幼稚園である。交通の便が悪く、寒さの厳しい地方、北海道、東北、北陸では、幼稚園の普及は遅れた。ここで、キリスト教幼稚園が果たした役割は、大きい。欧米の婦人宣教師は、幼稚園に西欧の合理的な生活様式や文化を導入した。幼稚園が西洋文化の橋渡しをしたといってよいであろう。

このようにして、幼稚園数は増加していったけれども、戦争によって、国家意識の高揚が強調されると、保育内容や保育方法もそれに関連するものが導入された。そして、戦争末期には、幼稚園閉鎖令が出されたり、戦時託児所に転換されたりした。

戦後、幼稚園は増え続け、経済成長の波に乗って、就園率も高くなった。就園率の最も高かったのは、昭和54、55、56年度であり、64.4％であった。しかし、少子化の影響で、平成９年頃から、幼稚園数も園児数も急激に減少している。幼稚園の就園率は、平成15年度が59.3％、平成16年度が58.9％である。そして、就労している女性が増えており、乳幼児を抱えている家庭では、保育園に子どもを預けて、働いている。幼稚園でも預かり保育を行っているが、保育園は乳幼児が対象であるし、遅くまで預かってくれるので、就労の母親にとっては、保育園に預ける方が好都合である。ところが、必ずしも希望している保育園に入園できるわけではなく、希望の園に入るために待機している乳幼児もいる。

ちなみに、統計を細かく見ると、「女性の雇用者数は、平成15年、2,177万人だったのが、平成16年は、2,203万人になり、雇用者全体の女性の占める割合は、40％強である。また、合計特殊出生率は、戦後最少と言われた平成14年の、1.32人をさらに下回り、平成15年も、平成16年も、1.29人である。さらに、平成15年と比べて、平成16年は、幼稚園数が113減少し、園児数は、7,100人減少した。」[2)]ことが分かる。

このような幼稚園の現状を考えると、園の保育内容を改善したり、教師の質を高めていかなければならないのではないかという思いに至るのである。

3　倉橋惣三の生涯と業績

倉橋は明治15年12月28日、静岡県に生まれる。東京府立第一中学校卒業を経て、第一高等学校文科

を卒業する。東京大学哲学科心理学専攻（元良勇次郎に師事、児童心理学･幼児教育学を研究）。引き続き、大学院に進学。学生時代から、東京女子高等師範学校付属幼稚園等に遊びに行き、子ども達に慕われた。卒業後、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）講師となる。明治45年頃から、日本幼稚園協会の主幹として機関誌『幼児の教育』の編集に当たる。

大正６年、東京女子高等師範学校教授に就任、爾来前後約25年にわたって付属幼稚園主事を勤め、その間３年間は附属高等女学校主事の職にあった。大正８年～11年、文部省在外研究員として欧米各国に派遣される。帰朝後、主事に復帰し、海外での識見を駆使して、児童文化の発展に大いに貢献した。大正11年に創刊された、雑誌『コドモノクニ』の編集顧問となり、主として童画を中心とした美しい絵雑誌の編集に力を注ぎ、高い評価を得たのである。この雑誌は、大正７年創刊された『赤い鳥』とならんで、日本の国の児童文化、児童芸術の発展にこの上なく寄与した。絵雑誌として大正15年、『幼稚園雑草』を著す。昭和２年、観察絵本『キンダーブック』創刊、編集顧問となる。

昭和３年、天皇、皇后に「乳幼児精神発達」を進講。昭和４年、文部省社会教育官を兼任、成人教育の指導に関与。中央社会事業協会その他の団体にも携わる。（昭和21年まで）

昭和６年、岩波講座『教育科学』のうちの第一冊として『就学前の教育』を執筆。昭和９年、『幼稚園真諦』、『日本幼稚園史』（新庄よしこ共著）を著わす。天皇、皇后に「児童教育問題」を進講。（12年まで）昭和11年、『育ての心』を著す。昭和14年、『フレーベル』を著す。昭和21年、教育刷新委員会委員の一人として、幼稚園を教育体系に位置づけた。女子教育研究会を発起。昭和23年、日本保育学会創設、会長に就任。文部省の『保育要領』の作成に、指導的役割を果たした。昭和24年12月10日、東京女子高等師範学校教授依願免官。退官後も幼児教育の発展のために、活躍した。昭和27年3月15日、東京女子高等師範学校名誉教授となる。昭和29年、『子供讃歌』を著す。昭和30年４月21日、逝去。（行年72歳）[3)]

４　幼児教育論

（１）教師論

倉橋惣三選集から、教師論と思われるところを取り上げ、筆者の解釈を交えて紹介する。

１）幼児を愛すること、幼児を尊重すること

幼稚園教諭は、まず、幼児を愛することができなければならない。本当に幼児のことを思う人でなくてならない。しかし、それだけでは足りないのである。即ち、幼児を尊重するということである。人格の尊厳は、子どもであれ、大人であれ、人間だれにでも適用される。子どもはまだ小さいけれども、人格を持った未来の大人である。子どもをよく観察して、驚嘆することは、発達ということである。発達は、自然の営みであり、子どもの発達状況には目を見張るものがある。勿論、発達力は子どもによって、様々であり、早い、遅いの個人差がある。

「この発達なるものは、幼児各自が有するところのものではあるが、我々が幼児の発達に驚嘆することは、自然の偉大さに驚嘆することである。この意味において、幼児を尊重することは、即ち、自然を尊重することである。」[4)]

発達に目を向けて、驚嘆するところは、心理学者としての倉橋を十分認識させるものである。また、発達が自然であるという考え方は、心理学もさることながら、教育哲学の学問領域にも造詣が深いということである。

２）いつも笑顔を絶やさないこと

このことは、簡単なことのようで、さほど簡単なことではない。子どもと接している時は、どんなにつらいことがあっても、機嫌の悪い顔や、悲しい顔を子どもに見せてはいけない。悲しいこと

があったら、少なくとも、子どもの前ではその気持ちを抑え、後で存分に悲しめばよい。子どもは、教師の顔色を敏感に読み取ってしまう。子どもの面前では、陽気に振舞い、普段以上に子どもとはしゃげばよい。しかし、身体の具合が悪い場合には、休まなくてはいけない。

３）人情に満ち溢れた人であること

幼稚園教諭は、上記にあることと類似しているが、やさしい人でなくてはならない。子どもに限らず、人はやさしくされることに、無上の喜びを感ずるものである。まして、子どもは発達の途上にある。教師からやさしくされると、それが、子どものやる気、活力を呼び覚まし、諸々の発達の営みを刺激することになる。

教師の暖かさや、濃やかさは、恰も露や日光が植物の種子を刺激し、生長を促すように、子どもを喜ばせ、子どもの意欲を喚起させるのである。

４）慎重さ

子どもは自由であるが、教師は守るべきことをわきまえていなければならない。倉橋は教師の守るべき態度として、「積極、大胆、長閑さ、細心、深慮、慎重」[5)]を挙げている。

筆者にとっては、これら六つの中では、慎重さが一番大切だと思われるので、慎重さのみ取り上げた。慎重さを忘れなければ、子どもと接していても、さほど失敗することはないであろう。どんなに子ども達と楽しく遊んでいても、教師であることを忘れてはいけない。

「自分みずから戒め慎しみてみだれるところのない一点の厳粛味、それのないものには子どもを託すことはできない。」[6)]

厳しい訓戒である。若い教師は、子どもと戯れ、楽しみ、つい教師であることを忘れがちになるであろう。いかなる時にも慎重さを念頭に置いていれば、羽目を外すことはないのではないか。

５）子どもから学ぶこと

教育上の独創的な見解は、書物からではなく、子どもから学ぶものである。「子どもから学ぶ」はフレーベルの格言ということであるが、教育の目的も、内容も、方法もすべて子どもから出発しなければならない。ペスタロッチーにしても、フレーベルにしても著名な教育者は、皆そうであった。子どもから学んだもの以外のものは、殆どが失敗に終わるであろう。教育は、机上の理論ではなく、生身の人間が対象なので、眼前の子どもから、教えられたり、反省させられたり、新しい教育法が生み出されるのである。

６）言行一致

人生訓ではあるが、筆者は教師論として、取り上げたい。倉橋は、ソクラテス(Sokrates, 前470－前399）の知行合一、マシウ・アーノルド（M. Arnold, 1822－1888）の「人間の生活の三分の一は考える事で、三分の二はこれを行う事である」の名言、また、スタンレー・ホール（G. S. Hall, 1846－1924）の「人間の性格は、その人の活動能力の総和である」の言葉を挙げている。そして、「活動能力、即ち、世の中に立って、強い力を以って事をするということは、その人の筋肉の力、神経の力である。（中略）すべての困難に堪え、自分の感情や、自分の知識に従って、自分のなすべきことを勇気を持ってなし得ることは、その人の神経の強さである。」[7)]と主張している。

思考しないで実行することも、思考して実行しないのも、人間として未熟である。すべての人間は、言行一致、有言実行しなくてはならないが、自分のなすべきことを勇気を持ってするということは、それだけの力がなくてはいけない。実力があれば、勇気は湧いてくるものである。教師は指導者であるので、特にこうあるべきである。

７）幼稚園教諭の資格のある人とは

幼稚園教諭になれる資格のある人とは、以下の三つである。

一つは、苦労を厭わぬ人である。つらいことがあっても、365日子どもの前で笑顔で、一緒に遊ばなくてはいけない。こんなに子どもと遊んだのだから、こんなに子どものために手をかけたのだから、と思っても、何の反応もないことが多い。熱心な人、誠実な人であればあるほど、人知れぬ苦労に悩むことがある。

二つは、慰労である。一生懸命やっていることに対して、第三者から慰労されるのではなく、幼児達から信用され、尊敬され、慕われること、これこそすべての苦労を忘れさせるものである。

三つは、歓喜である。保育の上で、特別に困難な幼児がいて、特別な労力を費やした結果、少しでも成果が現われた時、また、幼児のうちに僅かでも進歩が見えた時、教師にとってこれ以上の歓喜はないのである。

「教師の苦労に耐え得る人、教師の慰労に満足する人、教師の歓喜を第一の歓喜とする人、これこそ教師になれる資格のある人というべきだと思うのである。」[8)]

８）幼稚園教諭の養成に関すること

倉橋は、海外の大学を視察し、幼稚園教諭の養成について見解を述べている。即ち、幼稚園教諭と小学校低学年の教諭との免許の併有ということである。倉橋の主張を引用しよう。

「シカゴ大学、コロンビヤ大学において、幼児教育を研究し、幼稚園教育者を養成しているが、それは、大変に、徹底的で大仕掛けなものであった。殊にシカゴでも、コロンビヤでも、幼稚園の教諭になる人は必ず小学校の一年、二年を受け持ち得る人であるようにしていた。逆に小学一、二年の先生が幼稚園に行けば、立派な幼稚園教諭になれるように教育されているのだった。実にこのニ大学初め、他の場所でも幼稚園教育学がかかる位置を与えられ、幼児教育者がかくのごとく教育されているという事は、我が国における状態と非常な相違を感じたのであった。」[9)]

これについては、平成13年３月29日、　文部科学大臣決定として、「幼児教育振興プログラム」が策定され、第４の１の(３)幼稚園と小学校の連携の推進のイで、以下のように述べられている。

「幼稚園及び小学校の教員免許の併有機会の充実

教育職員免許法施行規則の一部改正（平成13年３月27日文部科学省令第22号）により、幼稚園と小学校の間の教員免許の取得に係る履修科目の取扱いの一層の弾力化が図られたことを踏まえ、教員免許の併有を促進する。

また、通信制、夜間の課程、科目等履修生制度の活用等を含め、幼稚園と小学校の現職教員が相互の教員免許を取得する機会を充実するための環境整備を図る。」[10)]

大正時代の中期に、倉橋が外国の大学で感じた小学校低学年の教諭と幼稚園教諭の免許の併有が、やっと我が国でも検討され、実現の運びになったのである。

また、(４)の幼稚園と保育所の連携の推進で、エ　養成課程の充実、科目等履修生制度の活用等幼稚園教員免許と保育士資格の併有機会の充実　についても提言されている。

（２）保育論

１）幼稚園教育の特色

倉橋は、幼稚園教育の特色として、四つ挙げている。

一つは、幼児の自発的な生活の尊重ということである。この中に、方法と内容の二つがある。方法においては、幼児を自発的な状態にさせておき、我々がこうしようと思っていることへ仕向けていくのである。即ち、自発的な状態を教育の手段として用いるのである。内容については、幼児の自発的な生活の内容を重視し、ここで積極的に幼児を教育していくのである。幼児の自発的な生活

とは、干渉しないとか放任するということではない。一切口出しをしないことや、放任することは、幼児の自発的な活動を真に尊重することにはならない。

二つ目は、幼児に幼児相互の生活を十分させることが、大切である。これに対して、幼稚園は、幼児一人ひとりの個性を尊重するところであると主張する人もいるであろう。勿論一人ひとりの個性を発見し、伸ばしていくことも考慮すべきである。一人ひとりの個性を没却しないで、ある標準をもって画一化しないようにすることが肝要である。自由な個性の尊重と、相互的な生活とは、矛盾するものではない。個性の自由な進展は、教師中心でなく、幼児相互の生活によってなされるものである。また、幼児の自発的な生活は、教師が幼児を指導していくことによって生ずるが、相互生活によって自然に促進されるのである。

三つ目は、幼児の生活を分割しないようにすることである。幼児の生活は、渾然としており、色々なものが溶け合っているので、ある一点だけを取り上げて、教育しようとすると、統一のあるまとまった生活を壊してしまう恐れがある。幼児の自発的な生活の内容は、日によって別個なものが現われるのではなく、渾一した状態であるが、統一ある形で現われてくる。

四つ目は、幼児教育は、概念的、観念的でなく、情緒的であるということである。情緒を中心として、教育が行われなければならない。

２）　誘導保育論

『幼稚園真諦』の第一編に書かれていることを要約しよう。

「幼稚園の保育は、子ども本位に計画されるべきである。幼稚園の生活形態に無理があってはいけない。その生活形態が幼児に即して、正しく行われているかどうかは、我々の最も熟慮すべき点である。我々は、十分自然な子どもの生活形態を作らせておいて、そのうちに自己充実が十分できるように仕度してやらなければならない。幼稚園は、幼児の生活がその自己充実力を十分発揮できる設備を持つと共に、それに必要な自己の生活活動のできる場所であるべきである。しかし、子どもは自分の力で充実したくても、自分だけではそれができない。したがって、子どもの内に入って、子どものしている自己充実を内から指導していく必要がある。また、子どもの興味に即した主題をもって、子どもの生活を誘導し、最後に寧ろ一寸するだけのこと、即ち、この子どもにはもう一つこれを付け加えてやりたいという教導が行われるべきである。

幼稚園は同時に、幼児の性格の陶冶にも重きを置くべきである。しかし、それも幼児の生活に即してなされるべきである。強固な意志と洗練された感情は、子ども自身の自然の生活を、以上の真諦に従って保育していく間に伴い生ずるのである。幼児の個性についても、個性を予め調べて、個性に相応するように保育することは有益ではあるが、各々の子どもの生活に即して保育していく限り、自ら個性的になるものである。

最後に、幼稚園の教師は子どもの生活を圧迫するような強い存在にならないこと、しかも子ども達のために指導することにおいて、誘導することにおいて、教導することにおいて、実に周到な、実にこまやかな活動をしている人でなければならない。

結局、幼稚園には、種々な保育方法があるが、それを実行する場所ではない。方法を子どもに当てがうのでなく、一人一人の子どもから方法が生まれて来るのであり、幼児が幼児として生活させられる所である。」[11)]

上記にあるように、自己充実を十分発揮できる設備とは、「現在の幼稚園教育要領でいう**環境**に置き換えて考えられる」[12)]のである。また、子どもの自己充実を内から指導するとは、教師の教育目的に子どもを引き寄せるのではなく、子どもができないことを援助し、あくまでも子どもの気持ちにそって指導するということである。

３）幼稚園の初めと終わりについて

倉橋は、幼稚園の一日の始まりは、子どもの自由遊びから、と主張している。

「従来の幼稚園の通有の型といってもいいかと思われるのは、朝は、幼児達を一応、幼稚園へしっかり入れて、それからいろいろ解いたり散らしたり、まとめたり緩めたりするといったふうの順序にいくのである。しかし、もし幼児の生活のそのままを、どこまでも保育法の土台にしていこうとするならば、朝において、先ず十分に、自由の感じを、子どもにもたせることが、最も大切であるとすべきである。アメリカの新しいナースリー・スクールが、朝子どもが来ると、先ず自然の自由遊びを十分楽しませるのも、実行上としては相当極端だとお考えになる方もあるかもしれないが、その精神において我々の大切な参考になるものと思われる。」[13)]

また降園前についても、倉橋は意見を述べている。

「幼稚園から家へ帰るときには、帰るらしい感じを、幼児なりに持たせたいと思うのである。ただし、よく幼稚園で紋切り型の『今日の稽古も済みました』を、機械的に歌わせて帰らせるが、私の好みを遠慮なくいうなら、あんな形式的な一斉的な歌の挨拶は私は大嫌いである。」[14)]

教師と幼児が一人一人挨拶を交わし、「今日は、何が楽しかった？」「今日は、〇〇君とけんかした」「では、仲直りをして帰ろうよ」等、教師は、一日の幼稚園生活を幼児に思い出させ、おもむろに帰らせることを、倉橋は提案している。

筆者が多くの幼稚園を見学した限りでは、朝、自由遊びで始める園は殆どなかった。但し、早く園に来た幼児は、園庭で活発に遊んでいた。昼食の前には、お弁当の歌、降園前には、お帰りの歌を歌っている園が多いように感じた。

４）家庭と幼稚園の関係

倉橋は、家庭教育研究が欠けていることを、厳しい調子で指摘している。

「家庭教育の学術的組織的研究の怠られていること、けだし誠に久しいものである。今日学校教育の研究がこのように活発に進歩する世にあって、家庭教育の研究の欠けていることは、あらためて考えれば、むしろ奇怪とすべき程のことである。」[15)]

そして、家庭と幼稚園との連携の必要を早くも察知していた。

「家庭自身が幼稚園と人間的な親しみの関係にならなければ、ほんとうの教育は到底出来ないということである。子どもを幼稚園におくることは、子どもを中にして家庭と幼稚園両方が相抱くようにして教育していくことにほかならない。」[16)]

今や、子どもを取り巻く環境は変わり、家族全員で話し合いながら食事をすることもあまりなく、子どもは孤食をしたり、両親の顔さえ毎日正面から見ることさえない状況である。しかし、本来、家庭は最初の、血縁者による集団であり、その教育は自然で対面的である。いかなる時代になっても、親は我が子の教育の義務を放棄してはいけない。

「家庭教育は、ある意味においては、一種の自然的教育であって、その教育者たる親と、被教育者たる子との関係は、必ずしも教育的知識が先になって行われるものではない。（中略）この家庭教育に必須の教育的知識の研究に最も多くの便宜を有するものは、即ち幼稚園である。（中略）学校教育は、家庭教育に無関係に、多少の何物かを児童に与え得ることもある。しかし、幼稚園教育は、家庭教育の協力なくして、殆ど真の教育を期し得ないのである。」[17)]

この時代に、家庭教育研究の必要を力説していることに、感服するものである。また、家庭と幼稚園の関係をこれ程までに、強調した教育者がこれまでにいたであろうか。

（３）先哲の教育思想の解釈

倉橋の生涯と業績で述べたように、倉橋は文部省から、教育学の在外研究員として、欧米に派遣さ

れた。大正８年12月より大正11年３月まで、アメリカやヨーロッパの大学や幼稚園、ナーセリー・スクールの現況を見学したり、先哲の遺跡巡りをした。倉橋は数人の先哲を挙げ、解説している。

ここでは、コメニウス、ルソー、ペスタロッチー、フレーベルを挙げる。この四人は、子どもを尊重し、家庭を重視したことで、共通性がある。また、幼稚園教諭は対象児が幼少なので、親のようでなくてはならない。したがって、先哲の思想から教師論として、学ぶべきものがあると考え、倉橋の解釈を要約し、筆者の私見を述べたい。

１）コメニウス(J.A.Comenius, 1592－1670)

「モラヴィヤの大教育者、コメニウスは、近世教育史の祖であると同時に、就学前教育の祖でもある。彼の企画した教育制度の国民学校（６歳から12歳まで）の前の段階、**母親学校**は、彼が最も重視した教育期である。

コメニウスの就学前教育論の特色として二つ挙げられるが、一つは、幼児の自発性の尊重と遊びの重視である。後の教育者と比べて、綿密とはいえないが、その核心は近世の科学的幼児教育論の偉大なる先駆者といえる。二つは、幼児期の教育を家庭教育即ち、母の教育に委任していることである。ペスタロッチーが説いている程徹底した家庭主義教育説ではないが、幼児教育の本質において、正しい方向を指向しているものといえる。」[18)]

コメニウスは子ども時代に、両親を亡くし、宗教団体の下で育てられ、勉学に精励したので、家庭や母親への思いは特別であったのではなかろうか？

２）ルソー(J.J.Rousseau, 1712－1778)

「コメニウスに次いで、ルソーは幼児教育に特別に留意している。『エミール』(Emile)の第一巻は、幼児期の教育論であって、自然主義の教育説が鮮やかに論じられている。(中略)　この自然主義は、児童の発達性の自然を尊重するという点で、また、そのために児童の心理の忠実な研究を重視する点において、近世教育の全面に根本的な影響を与えた通り、就学前教育の正しい考え方にも、最も深い原動力となっているのである。似而非幼児教育、常識的幼児教育に対して、鋭い批判と強い打撃とを加えて、真に幼児教育を高調した点は、近世的というよりむしろ現代的といわれるべき色彩に輝いているものである。(中略)　幼児の生活の自然を尊重することを、放任と誤解されることがあるが、他の作品で、この時期の教育に対する母の力を礼讃し、鋭く自然生活を説いた筆で、やわらかく家庭生活を描写している。(中略)　ルソーもまた、就学前教育において、強い家庭主義であった。」[19)]

ルソーが生まれてまもなく母親は亡くなったので、彼は母親の愛情を知らずに育った。また、当時は子どもを施設に入れるのが普通であったのであるが、ルソーは５人の子どもを皆、養育院に入れたことに、晩年心を痛めたのである。その思いが『エミール』を書かせたのであるし、『告白』(Les　Confessions)で懺悔させたのである。『エミール』は、18世紀に執筆されたものであるが、本書には現在の教育やしつけに活用できるものが多々あるのである。

３）ペスタロッチー（J.H.Pestalozzi, 1746－1827)

「ペスタロッチーが教育に関心を持ったのは、ノイホーフで若き父親になり、息子のヤーコプ(Jakob, 1770－1801)を観察し始めてからである。これは彼の『育児日記』(Tagebuch Pestalozzis ueber die Erziehung seines Sohnes）に明らかに示しているところである。幼児期生活から教育の真諦を教えられた彼が、幼児期教育の重要性を認識したことは、当然のことであったといえる。彼が最も力を籠めて説いている母による教育は、畢竟幼児期教育の留意に他ならない。

全般的に家庭の教育を尊重したペスタロッチーの幼児教育が、それ以前のだれの考えよりも、一

層濃やかな家庭主義であったことも当然である。ことに、あの無限なる母性尊重から、その母性の最純なる教育対象として、つまりは、就学前教育を多く論じていることになる。」[20]

また、倉橋は別の書で「ペスタロッチーの追想」というタイトルを設け、次のように記述している。

「第一に、ペスタロッチーには教育者としての自覚というようなものはなく、ただ教育に住していたのである。一生を教育の事実として終わったのである。第二に、ペスタロッチーの場合、教育をもって児童を見るよりは、児童を見ることそのことが彼の教育となったのである。彼はシュタンツの孤児の話を聞いて、いてもたってもいられなくなり、児童そのもののために赴き、衣食を与えたのである。児童のいるところに教育があったのである。第三に、彼にとって、教育は社会の事実であった。彼は、児童そのものを心理的にのみ見ないで、社会的に見ていたのである。ペスタロッチーにとって、人生即生活、生活即社会生活、社会的生活即職業、職業即勤労という、一連の理解がどこまでも具体的に存在していたのである。生活即教育は、彼にとって当然のことであった。」[21]

ペスタロッチーの家庭主義も、彼の生い立ちに起因している。５歳で父親を亡くし、敬虔な母親と忠実な下女バーベリー、そしてある日突然奉仕を申し出たリザベートの献身ぶりが、母性尊重、家庭教育の重視へと彼を導いたのである。

また、ペスタロッチーは貧民を救済し、彼らを幸福にすることが生涯の目的であった。彼は、物質的な貧困は、道徳的・知的な貧困が存在する限り、消滅することはないと考え、こうした人間的な貧しさを、教育によって救済したのであった。

４）フレーベル(F. Froebel, 1782－1852)

倉橋はフレーベルについては、かなりな紙数において、見解を述べている。以下に紹介しよう。

①　母性愛

生後７か月で母親を亡くし、幼児期に継母に邪険にされたフレーベルが最も求めたものは、母性愛ではなかったか？「母性愛を得ることができなかったフレーベルが、世の幼児達に最も与えんとしたものが、母性愛であり、現に幼稚園そのものが幼児によき母を与えんとする心から始まったものなのである。」[22]

②　児童観　（神性説）

フレーベルは、『人間の教育』(Die Menschenerziehung) の冒頭で「すべてのもののなかに、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している。（中略）すべてのものは、神的なものが、そのなかに働いていることによってのみ、はじめて存在する。」[23] といっている。人間のうちにも神性が働いており、児童も神性の所有者である。そして、その働きは必ず善であり、善でなければならない。つまり「フレーベルの児童観は、絶対的楽観主義である」[24] といってよかろう。

「フレーベルが児童を愛し、敬重したのは、理論からの派生ではなくて、彼の天禀の流露であるが、それを理論的に裏づけ、進んでは観念的に信念化している要素はこの神性観である。」[25]

③　自発発達説

フレーベルが『人間の教育』でいっているように、人間および人間に内在する人間性は、固定化したもの、不動なものではなく、また完全に生成しきったものでもなく、絶えず生成し続けるもの、常に前進し続けるものと考えるべきである。

この思想は、フレーベル独自のものではなく、コメニウス、ルソー、ペスタロッチーから受け継いだものであろう。

④　幼稚園（Kindergarten）の創案

幼稚園即ちキンダーガルテンの語は、フレーベルが創案したのである。彼が初めてその試みをブランケンブルクに設けた時、その名称に苦心惨憺した。さんざん考えあぐんだ後、ある日突如として彼の心に浮かび上がったのが、この新しい語であったのである。

「園という一語には、幼児のいる場所としてのやわらかい感じを伴うと共に、幼児の生育発達の場所として、フレーベルの教育思想の中核をなすものである。」[26)]

晩年、彼は、リーベンシュタインに定住し、幼稚園と共に保母養成所を開き、保母の教育のために心血を注いだ。彼は、いつも子ども達との遊びをこの上なく楽しんだので、里人から「馬鹿じいさん」と呼ばれたのである。

「元来フレーベルの無愛想な外貌と素朴な風姿とは、決して幼児をひきつける温雅な魅力をもつものではなかったが、彼がリーベンシュタインの村路を通ると、家の中にいる子どもたちまでもが駆け出して来、やっと歩けるような幼い子も、彼にすがりついて一緒に歩きたがるのであった。」[27)]

フレーベルの児童観が神性的児童観であることもさることながら、彼は心底から幼児を愛し、幼児と一つになって、幼児と遊ぶことに無上の喜びを感じていたのであろう。

⑤　恩物（Gabe）

倉橋は恩物には、批判的であった。「いかに天賦の教育者であり、児童生活への透見の鋭かったフレーベルといえども、その児童観には主観的なところがあった。のみならず、彼の考え方の傾向には、当時の浪漫派の哲学と相通ずるところのものが多く、ひとりで理詰めに方法を考える時には、主観本位に傾くところもあった。彼の恩物は、多分にフレーベルのこの要素からの所産であって、幼児のものというよりも大人の理屈が主になっている。その象徴主義と論理主義とは、幼児の生活にはふさわしくないものである。」[28)]

このように、フレーベルが恩物に対して論理主義に傾き、抽象理論的に理屈づけたことについて、倉橋は二つの理由を挙げている。

「その一つは、幼児期からの瞑想癖、さらにそれが当時の哲学思想によって強められたこと、もう一つは、ベルリン大学でワイス教授の下で、鉱物学を研究し、大学附属の鉱物博物館の助手をしていたのであるが、その時代の結晶学の興味や知識によるものである。」[29)]

フレーベルは『幼稚園の作業遊具についての全体にわたる書簡式の説明』[30)] で、恩物について仔細に説明している。これを読むと、フレーベルの恩物への熱い思いが伝わってくる。しかしながら、子どもにとっても、教師にとっても、恩物の説明を理解するのは困難である。

おわりに

以上、倉橋惣三の幼児教育論を考察したのであるが、倉橋の児童への限りない愛情がひしひしと伝わってくるようであった。

倉橋は学生時代から、幼稚園に通ったそうであるが、それはフレーベルに幼稚園を創設させたのが幼児であったように、倉橋も子どもに導かれて、園通いをしたのであろう。

教育への寄与ばかりでなく、「コドモノクニ」や「キンダーブック」の編集の指導･助言等もしていたので、我が国の幼児文化の発展にも貢献したのであるが、この仕事によって、幼児教育への彼の識見は、より豊かに、また、一層深められたのであろう。

この時代に早くも、倉橋が家庭教育研究の乏しいことを指摘していることに、驚嘆の念を禁じ得ない。家庭と幼稚園とが車の両輪のように連携して、幼児の教育に携わっていかなければならないことを、倉橋はずっと以前に察知していたのである。

また、教育職員免許法施行規則の一部が改正され、小学校と幼稚園教諭の免許の取得に係る履修科

目の取り扱いの弾力化が図られたことは、喜ばしい事である。倉橋が大正末期に主張した小学校の教諭と幼稚園教諭の免許の併有の一部が実現されたのである。

先哲の教育思想に対する倉橋の意見は、教育史家の見解より、具体的であり、分かりやすく、新鮮である。

倉橋が先哲の中でも、難解の定評があるフレーベルの書を読み、その思想を纏めるのに最も紙数を割いたのは、単に世界で最初の幼稚園の創設者であるばかりでなく、フレーベルの子どもへの豊かな愛情が倉橋の心に共感を呼んだからであろう。

しかし、倉橋は恩物批判をしているばかりか、恩物をばらばらにして、竹籠に入れ、子ども達の自由遊び道具として提供したのである。元来、倉橋は野原や畑や海浜等の自然物玩具を重宝したので、理屈めいた恩物は、彼には歓迎されなかったのである。

倉橋の教育論は難解なものではなく、ごく至当な論である。読んでいて、至る所に子どもへの敬愛の情が滲み出ているし、読めば読むほど味わいのある教育論である。倉橋の教師論を、幼児教育に携わる者の研修会に是非とも活用して欲しいと思う。

筆者が関与している幼児教育者の養成の短期大学で、保育実習を終えた学生に、実習の模様を聞いた限りでは、倉橋が主張したように、いつも子どもの前では、笑顔を絶やさない保育士、子どもへの濃やかな愛情の持ち主、子どもへの対応のうまさ（例えば、子供同士が玩具の取り合い等でけんかをしても、すぐには止めないで、しばらく様子を見てから対応するそのタイミングのよさ等）、こういった教師が尊敬できるということである。

時代は変わっても、「倉橋の考え方は、幼稚園教育要領に、姿を変えてではあるが、生きている」[31]のである。

倉橋の深遠な幼児教育思想を雑駁に纏め小論としたのであるが、さらに幼児教育論を細部にわたって究明したい。他日を期したい。

倉橋の著作中の姆母は、幼稚園教諭あるいは教師にした。また、旧仮名づかいは、現代かなづかいに直したし、平易な文章にした。

［注］

1） 文部科学省編『文部科学白書』平成16年度　国立印刷局　平成17年　171～172ページ

2）『文部科学白書』448ページ
文部科学省　編『文部科学統計要覧』平成17年版　国立印刷局　平成17年　22、24、36ページ
厚生労働省　編『厚生労働白書』平成１７年度版　ぎょうせい　平成17年　392、515ページ

3） 岡田正章代表編『現代保育用語辞典』フレーベル館　1997年　483ページ
坂元彦太郎　『倉橋惣三･その人と思想』フレーベル館　1996年　174～175ページ
倉橋惣三　『倉橋惣三選集』第一巻　フレーベル館　2003年　405～406ページ
唐沢富太郎編著『図説教育人物事典』ぎょうせい　1984年　第10章15～19ページ

4）『倉橋惣三選集』第二巻　　1965年　268～269ページ

5）同書　34ページ

6）同書　34ページ

7）同書　328～329ページ

8）同書　257ページ

9）同書　398ページ

10） 幼児保育研究会代表/森上史朗編『最新保育資料集』ミネルヴァ書房　2005年　323ページ

11）『倉橋惣三選集』第一巻　15～57ページ
福田博子　『幼稚園の現状と課題』教育新世界　19　世界教育日本協会　1985年

12）黒﨑典子「いま、なぜ倉橋惣三なのか」森上史朗編『幼児教育への招待』ミネルヴァ書房　2003年　61～

62ページ
13)『倉橋惣三選集』第一巻　90～91ページ
14) 同書　116ページ
15) 同書　第二巻　373ページ
16) 同書　172ページ
17) 同書　373ページ、375ページ
18) 同書　第三巻　386～387ページ
19) 同書　388～389ページ
20) 同書　389～390ページ
21) 同書　第五巻　1996年　441～444ページ
22) 第一巻　362ページ
23) フレーベル著・荒井武訳『人間の教育』(上)　岩波文庫　1979年　11～12ページ
24)『倉橋惣三選集』第一巻　335ページ
25) 同書　335～336ページ
26) 同書　第三巻　395ページ
27) 同書　第一巻　307ページ
28) 同書　第三巻　396ページ
29) 同書　第一巻　388ページ
30) フレーベル著・小原国芳・荘司雅子訳編『フレーベル全集』第五巻　玉川大学
1986年　273～311ページ
31) 坂元彦太郎　『倉橋惣三・その人と思想』172ページ

(受理日：2005年12月５日)